
(仮タイトル) すらいむ?に転生

sin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（仮タイトル）すらいむ？に転生

【Nコード】

N8728X

【作者名】

sin

【あらすじ】

少し冷静で少し器用という没個性な男が異世界に転生する話
ただ、転生した肉体は不定形生物だった。

化物の体になった主人公が蹂躪、勝利、征服の快楽を知り……？

1 話目 開幕、序章、導入、プロローグ。 つまり冒頭（前書き）

処女作です。 つまり拙い文章があなたの眼を腐らせる可能性があるわけ。

そこんところしく

この小説は寝の好きな設定をいれまくった作品です。

黒ひげの能力を奪うところに始まり、事故ナギやマダンテ使いのスライムいいねってなってレベルアップシステムいれようとなった結果の作品です。

敵も強くするつもりですが、主人公の成長力には敵わない。

こういったのが嫌いな方は即退避。

1話目 開幕、序章、導入、プロローグ。 つまり冒頭

初めまして私の名前は中西柚木32歳童貞だ。

つまり魔法使いだ。 どうでもいいけど2回言いました。

私は所謂草食系で、彼女もいらなと思うてるし、結婚もどうでもいい。

私はもてたことがない。 私の親友はもてもてだったが。

私の親友は中性的な顔で体育は休むが運動神経がいいらしい。優しいのでかなりの人気を誇っていた。

親友はいつも私の近くにいた。いつも自分の家か私の家で遊ぼうと誘ってきて、そのくせ他の人からの誘いは断るので私は親友のふあんくらぶにいじめられた時期があった。

親友の説得により影からこっちを見てこっそり騒ぐのはやめて欲しいがいじめはなくなった。

私はそんな親友の才能が羨ましかった。 あこがれていて、妬ましかった。

そんな自分に気付いた私は、高校を卒業してからすぐに一人暮らしを始めた。 誰にも相談せず、親にも住所を告げずに。親に言えば親友に伝えてしまいそうだからな。

そんなこんなでもう32歳。

会社の帰りに後輩と呑みに行った帰りにそれは起こった。

いつもの通りに知らない店があった。 このあたりはよくくるか

ら知らない店などないはずなのに。 気になった私は店に入ってみることにした。

店には余り物が置かれてなかった。

これでは何の店なのかわからない。 店主に聞くことにした。

「ここは何のお店なんだい？」

「ここは籤引き屋だよ。 1回2000円だ。 やってくかい？」

高かった。 籤なのに。

「何の籤なんだ？ 出店のとは違うんだろ？」

「この籤に書かれてあることが起こるんだ。 運命を決める籤とも思っていてくれ」

「運命？ おもしろそうだな、ためしに1回引くよ」

「なら、この箱から一枚引くんだ」

籤には当りが奥のほうにあるらしい。 だからあえて真ん中を引く！

「何だこれありえないことにも程があるだろ」

「ありえないことでも、そこに書いてあることは絶対なんだよ」

え？ と呟いた瞬間に目の前が真っ暗になった

最後に見たのは、さっきまで私がいた空き地と真っ蒼な顔でうつろたえる親友の姿だった。

そして目が覚めたとき私は暗闇の中にいた。

「どうしてこうなった」

「まさか異世界転生を引くとは、10000枚中3枚しかないんだがな。転生系は何に生まれ変わるかわからないからかなり危険な部類だし。どうなったか見ものだ。それにしてもさっきのやつ、普通の転生の時と死因がちよっと違ったな。原因はさっきのやつか。よし、つぎはさっきのやつにしよう。あはははははは。せいぜい楽しませてくれよ。」

1話目 開幕、序章、導入、プロローグ。 つまり冒頭（後書き）

後書き

マスターベーションにもほどがある小説だ。 と心の中で予防線

現在6話目書き終えて、能力考えるのと量がちよつと…… って感じになってきた

面倒なのでスキルはあまり書きません

7話以降のスキルの扱いなんかが雑になります

大体ノリだけで書くからこうなるんだ。 構成なんてないから頭の中でゲームやアニメや漫画を思い浮かべて話作ってるのでこれである種二次創作？

転生先は不定形生物でした（前書き）

短いので一気に投稿

転生先は不定形生物でした

どうも異世界転生のくじをひいたらいつの間に暗闇の中にいた者です。

とりあえず周囲の状況を把握しよう。

ここは暗い洞窟の中、近くに水が流れる音がしてる。情報はこれだけだ。

ひとまず水の確保に向かおう。

……歩けない？

何だこれは、そういえばやけに視線が低い。

首を動かさなくてもあたりを見渡せる。

私は水の気配なんてわからないしあきらかにおかしい

自分の姿が見えない事がこんなに不安になるとは……

どうやって水場にいくのか。このままでは餓え死ぬ。

それから少ししてようやく前に進むことができた。

どうやら前に倒れこむような感覚で全進できるようだ。

動くのにいちいち全身を使わないといけないとは面倒な。

不思議と疲れないし這って進んでいるようだが以外とはやい。

たしか転生したんだっとな。

まさか蛇にでもなってしまったのだろうか。

いや、転生なんて……

私は覚えている。

——ありえない……とは言いきれない、か。

あの時何があったのかは知らないが何も感じる事が出来なくなっていたあの感じ。

恐らくあれが『死』だろう、もう二度と経験したくない。

痛くはないが怖いのだ。

もう死にたくない

生きるためにできることをしよう。

まずは金を稼がなければ……

そんなことを考えながら音を頼りに進んでいくとやはり小さな湖があった。

その中心には祭壇のようなものがあるがいまは気にしてられない。

恐る恐る自分の姿を確認しようと水に映るものを見ると……

スライムだった

——ただし白く濁っているが。

あの最弱と名高いスライムである

大抵のゲームでは核を斬られればお終いという設定があるが恐らくそっちの仕様なのだろう、半透明な体に小さな塊が浮いている。

体が液体でできているため物理的な攻撃には強いらしいが、打撃以外は普通に効くんじゃなかったかな

例えば叩きつけられたり、剣で斬られたりすれば簡単に死ねそう
だ。

これからどうやって生きていけばいいんだ……

転生先は不定形生物でした（後書き）

これスライムじゃなくて「ゆうなま」のピュアニジリゴケじゃね？と書いてる最中思ってしまった。

別に白い必要は感じなかったけれど、視覚的になんか卑猥じゃん。
白濁色

ちなみにこれが寝なりの18禁描写です

私に出来る事、出来ない事（前書き）

この液体の体出来る事の確認

因みに攻撃力だけならコボルトに匹敵して、
防御力はこの世界で
一番低い状態

私に出来る事、出来ない事

どうも、不定形生物になってしまっている者です。

この体は水の補給が余り必要なさそうなことに気づいたんだ。
水分が抜けにくい体みたいだし

ここは結構ひらけた場所みたいなので自分がどれだけの能力があるか調べておこう。

私のような凡人には細かい検査と調整が必要なのだよ。

特にこんな野生生活が要求される場合は――――経験なんてないけど。

どうやらこの体、思っていたよりも能力があるようだ。

まず、速い。凄く速く動くことが出来る。

初めは慣れなかったが前に屈むような感じで走れた（足はないが）

ああよかった、某げーむに出る最弱の敵のように跳ねるのかと思っていたから……

もしくはあの泡のようにずるずるとしか動けないと思ったんだがこれはいいな。

そして、疲れない。どれだけ速く走っても運動しても疲れない。

次に、とても器用だ。前から人並み以上に器用だったがそれ以上に器用だと思う。

触手のようなものを体から出せるようなのだが、それを手の代わりに扱え、鞭のようにも出来る。

しかも自分の体のどこにでも視覚があるようで、どこから見るかは自分で決められるのみたいだ。

触手は伸ばしすぎると体積が減るのだが、自分の意思で斬撃、打撃と換えられるし、

そこらに落ちていた石を積み上げてみたのだが18段ほど積み上げられる程精密な動作が可能なようだ。

まあ、手が沢山あるようで並列思考をしなければまともに動かないのだが、それでも正確に積み上げることが出来た。

疲れないから集中し続けられるので予想外に便利な体だと喜んだ。だが、この体、ものを支える力がないのだ。

ある一定の大きさの石を持ち上げられなかった。

12歳児が全力でやっと持ち上げられるくらいの石を持ち上げようとしたが、無理だった。

触手はある程度、強弱をつけられるみたいで、叩く時に中ぐらいの石を叩き壊せて、貫く時は、木ぐらいなら簡単に刺し貫くことができた。

私が確認したことは大体このぐらいだな。

人間ではないとはいえ生きている以上は栄養を取らなければいけないだろう。

狩りなどしたことがないのでわからないが私に単純な力がない以上正面から戦うのは危険だと思う。

罨にかけるか不意を討つ位しか思いつかないな。

結局罨にかけて殺すことにした。

罨作りに時間がかかるのでそれまでは虫や草で繋いでいこう

野菜だけで生きられるだろうが肉も食いたいのだよ、肉を。

それにしてもどうやって食べようか。

こつ……絵の具の色が侵食するような感じで吸収できないかな。

体の中に放り込んでどうすればいいか悩んでいると虫が突然もがきだした。

そしてどんどん溶けてしまい、その間とても微妙な味がした。

どうやら味覚もあったようだ。

ではなくこれはお約束の体液を酸性にして溶かしながら摂りこむということか。

体の一部を切り離して相手を溶かす↓吸収↓体を回収といったことも出来そうだ。

切り離れた体は自由に動かせるみたいなのだが、ただでさえ並列思考がきついのに更に脳を（そんな物は見当たらないが）圧迫する。

私の平凡な頭脳が並列思考でただだけで凄いの、これ以上は演算能力が足りない。

高速思考なんて出来れば苦労はしないのだが、私は能無し才なしの平凡人間なのだ

——もう人間ではなさそうだが。

当面は畏にかかった獲物にぶっ掛けて弱らせる用途にしか使えないだろう。

畏を作り終わったのは結局次の日だった。

睡眠を摂らなくても生きていける体はあるが精神的に疲れることはあるようで結局一度寝ることにしたからだ。

造った畏は簡単な物で14メートルほどの落とし穴だ。

酸で溶かしながら決ると簡単に14メートル掘る事が出来た。

この穴に落ちた獲物に向って強力な酸を吐き出し、胸を一突きすれば倒せるだろう。

そして湖に仕掛けた罠に何か掛ってないか確認しに向って穴を覗き込むと、二足歩行の豚がいた。

豚は私の影に気付きこちらを見上げ恐ろしい表情で睨みつけ叫びだした。

……もしかして仲間を呼んでいるのかもしれない
そう思った私は早速捕食をするために作業を開始した。

強力な酸になった私の体を切り離して投げつけると少し驚いた後豚はすぐさまその太い腕で払い落としやがった

全身にかかるはずだった酸は命中しなかったが豚の腕は爛れている。使い物にならなくなったのだろう。

触手で豚の胸を突きに行くと腕で防御されたが酸にやられている腕では止められなかったようだ。簡単に貫通してしまった。

これで動きは止まったがまだ油断はできない

私は触手で頭を本気で殴り、また、もう1つの触手で心臓を貫いた
びくびくと痙攣している

まだ死んだかわからないのでさっき打ち落とされた体で豚を吸収することにした。

Level	up	5	+4
生命力	: 10 / 30		+20
魔力	: 3 / 5		+2
攻撃力	: 21		+9
防御力	: 16		+7
素早さ	: 78		+26
器用さ	: 56		+15
賢さ	: 38		+4

魅力：12 + 4

Skill get

NEW 『下克上』

NEW 『分析者』

NEW 『初級強化魔法』

NEW 『初級魔法』

NEW 『体液操作』

オークからスキルを奪い取りました。

NEW 『怪力補正』 + 1

NEW 『絶倫』 + 1

NEW 『初級性魔術』

武器：鉄の槍を吸収しました。

NEW 『貫通補正』 + 1

NEW 『貫通耐性』 + 1

レベルが上がったので吸収効率が上昇しました
触手の操作をしやすくなりました

オークの所持スキルを吸収しました

何かが頭の中響いてきた

よく判らないが強くなったということだよさそうだ。

…… ちょっと待て。魔術ってなかったか？おい。

私に出来る事、出来ない事（後書き）

攻撃力と単純な力は「ではありません。

力の強さは持つことのできる道具に関係します

例えばサイクロプスは片手に超巨大鉄製棍棒を持っても、簡単に振り回せます。

ゴブリンも鉄の剣や槍をぎりぎり使えるレベルで、一人一人を2匹がかりで持ち運べます。

因みに攻撃力には酸や魔法の攻撃力は反映されず、それぞれ隠しパラメータとして存在しています。

私に秘められし能力（前書き）

前話と同じく能力確認が続きます
話は待ったく進みませんが一応必要なことかと

私に秘められし能力

どうも、おおくという豚を喰らったら謎のお知らせが頭に響いた者です。

とりあえず先ほど頭に突然響いてきたことの中に魔法を使えるようになったみたいなき事があったんだが、どう遣えばいいんだ。

魔法だの魔術だの使い方がわからないと意味がないだろう。誰か教えてくれ。

などと思っけていても誰もいない。というか今の俺を見たやつがいたら驚いて逃げるか襲い掛かってくるかだろう。

先ほど手に入れたすぎるに分析者というのがあったと思うのだが、まず、すぎるの使い方がわからない

ぶんせきーぶーーん 一二（ ^ω^ ）二 せきいなどとふざけていけると突然目の前に透き通った板状のものが現れた。

そこにはこう書かれていた

名前：ナカニシ・ユズキ

種族：■ ■ ■ ■ ■

性別：♂？

状態：冷静

Level：5 成長限界：5 / 7 + 3

生命力：30 / 30

魔力：5 / 5

攻撃力：21

防御力：16

素早さ：78

器用さ：56

賢さ：38

魅力：12

Skill

『冷静』

『異世界からの遭難者』

『吸収』

『超越』

『成長』

『触手操作』

『体積変化』

『体積操作』

『体液変化』

『物理半減』

『精密』

『並列思考』

NEW 『下克上』

NEW 『分析者』

NEW 『初級強化魔法』 消費魔力：4

NEW 『初級魔法』 消費魔力：2

NEW 『体液操作』

NEW 『怪力補正』 +1

NEW 『絶倫』 +1

NEW 『初級性魔術』

NEW 『貫通補正』 +1

NEW 『貫通耐性』 +1

なにやら自分を分析したようだ『冷静』のすぎるによって何故か
落ちていていられる。

いつもならもっと、なにこれ怖いとかいって興奮してたのに。
もしかしてさっきの豚を殺しても動じなかったのはそういうこと

なのか？

『分析者』は念じていたら使えた。

『冷静』は勝手に発動していたようだ。

常時発動型とかなのだろう。となると魔法は常時型なわけがないから念じればいいのか。

「むむ……ふあいあ」

轟ッ

凄い物が出た。ちよつとした火炎放射つて感じた。

というか何気に私がこの体で喋ったのって初めてなんだが、つか喋れたのかよ。

「あ・ああ・あ、うん喋れるみたいだな」

と、いつても一人で喋るのはなんだか淋しいので結局喋らないだろう。

魔法に関しては適當なことをいいながら想像すれば使えるみたいだ。

回復魔法の想像とかあまりできないんだが、そこは要練習。

ふあいあ、じゃないものならどうなるんだろうか。

じゃあ次は、

「めら」

ボウッ——バンッ！！ジユウウウ……

火の玉が出てきた。

火力はある方なのだろう。水蒸気がそこそこ出ている。

ふあいあは地面抉っていったから威力はそうでもないのだろう。火をつけるのに便利ぐらいだ。

私にできるのは初級魔法なので めらみ や ふあいらは使えないだろう。と、いうわけで

「ぶりざど」

……何も起きない。

もういちど

「ぶりざど」

駄目だった

なにがおこったのか分析する。

・ ・ ・ かなり便利な技だなおい

ただの魔力切れでした。

5の魔力では2発が限界ということなのだろう。

魔法だなんて新鮮だな

こんな反応ですむのは『冷静』のおかげなんだろうな、実はかなり驚いてるんだが。

そして気付いたことがある。

魔力は解るが魔法攻撃力は全くわからない。

『補正』のような感じで+補正でもかかるのだろうか
それとも隠し熟練度？

支える力がなくても触手の攻撃力は簡単に岩を破壊できるのだ。

恐らくれべるが関係していると思うんだが……これがもしそうだとしたら強い相手であればあるほど魔法の威力が上がるのだろうか。

これからどうしよう、死なないように強くなるかな……

私に秘められし能力（後書き）

次話もあまり進みませんので同じ日に投稿します

戦闘準備、私の策（前書き）

一 対多数戦の為の作戦作り

戦闘準備、私の策

どうも、生き残るために強くなろうとしている者です。

強くなければあの豚のように殺されるような環境だから、私にはきついが何とかなるだろう。

早く強くならなければ死んでしまう……

あの化物を殺すことと食べることのどちらでもよさそうだが、そうすれば強く成れるようだ。

そして相手が自分より強いほど成長が早くなる。

――豚は自分よりかなり強かったようだ。

そうとわかれば私の行動は早かった。まずは偵察から始めた。周りのものを最大限に活かさなければ死んでしまう確率が上がるからな。

面倒だが私には正面から闘り合って生き残れる自信がない。そうするのをもっと強くなってからだな。

触手を使ってこの湖の周りには3種類の化物がいた。

子鬼と犬人と豚人だ。

解析を使った結果名前は「ごぶりん」「こぼると」「おーく」というらしい

子鬼ゴブリンは薄汚い色をしていて、背丈は小さく、頭に小さな角が生えている。

犬人コボルトはそのまま二足歩行の犬だ。人が立っているような姿だったのでそう勝手に呼んだ。

豚人オーク こいつはこの前食べたやつと同じ種類のようだ。

この3種類とも繁殖力が強いようだ。特に子鬼と豚人が多かつ

た。

種族として一番強いのは豚人のようだが、時々犬人にやられているところを見かけた。

どうやら武器の扱いが一番うまいのが原因のようだ。

槍を無闇に振り回す豚人と確実に攻撃を当てていく犬人。

1対1ならどちらが勝つかわかるだろう。

と、いうことで一番弱い子鬼から殺していくことにする。

3種族はうまくバランスが取れているようで、

豚人が犬人を襲う↓犬人が子鬼を襲う↓子鬼が人里をよく襲うまたは魔法を使って豚人に攻撃

という連鎖が起きている。

子鬼は魔法を使える個体と使えない個体があって、威力も同じ強さの個体でも強い個体と弱い個体がいる

このことから魔法の威力はある程度種族で決まり、強い、弱いは個体差があることがわかる

私の魔法の威力は強いほうのようで、子鬼の魔法は豚人に集団で焼き殺すのに対し、私の魔法は一発で火達磨に出来る。

1発で殺せないし、連発もできないので余り使えないが

人に逢いたいと想ったが今の私はあいつらと同じ化物。 見つかれば殺されてしまうだろう。

そんなのは嫌だ。

私は元人間だから、何もしていないのに剣を向けられるのは辛し嫌なんだ。

私は普通の人間———その他大勢といった立ち位置だったからよく判る

人は自分と少し違う人間を好み、かけ離れている人間を迫害する。事実、私の親友は他の男子から距離を置かれていた。

……たぶん怖いからだ。 皆、天才と呼ばれるやつには関らない
か気に入られようとするのどちらかだ。

今の私はどこからどう見ても人間ではない。 出会えば間違いな
く殺される。

子鬼は他種族の雌または同種族の雌と生殖行為をすることによっ
て繁殖するようだ。

この間犬人の雌を集団で襲っていたのを見たことがある。 豚人も
同じようにして繁殖するようだ。

発見した時は見るに絶えず、思わず逃げ出してしまった

子鬼は弱い割りに大勢いる。 それこそ他の種族よりも多く、子
供の成長も早い。

群れの中には他の種族にも言えることだがそれぞれ長がいた。
かなり強そうで知恵もそれなりにあるようだ。 こいつにだけ気
をつければ大丈夫だろう

子鬼は群れるが長以外知恵がない。 群れているのも長の命令だ
ろう。

と、いうことはこいつさえ殺せば命令系統は駄目になるのだろう。

なんだかゲームのようだな。

だが私は経験値を溜めたいのだ、皆殺しにする。

私の策はこうだ

子鬼の数を減らしていけば長もその内気付く。

そして身を守る為に一箇所固まるように指示を出すだろう。

巣穴に戻った子鬼達の出入り口を1箇所を除いて塞ぐ。入り口を崩せばいいだろう。

外に残った子鬼は1匹を残してそれ以外を殺して吸収する。

残した一匹を巣に逃げ込ませて恐慌状態にする。

それを追いかける。その際入り口を1つを除いて総て塞ぐ。

曲がり角があっても出口を塞いであるから逃げられない。結果、更に地下のほうにいくことになる。

どんどん追い詰めていつて最後には長と戦うことになるのだろうが、一対一ならば勝てるだろう。

複数と戦う時は魔法を使う固体の援護が厄介なので優先して殺す。

この作戦ならばいけるだろう。

最初は一番小さい巣を襲うから失敗することはないはずだ

幸い私のいる地域はこの世界でもかなり端の方のようで、小さな人里があるが、そっちの方向以外は海に囲まれている。

木々の多い森林地帯でもあり、身を隠すのに良い。

奇襲にもいいだろう。

子鬼が最初の襲撃で巣を捨てることはないと思うが、できることなら、一回目で決めたい。

戦闘準備、私の策（後書き）

奇襲しか思いつきませんでした

幸い攻撃力があるので、刺して貫いて突然酸をぶっ掛けて溶かす
作戦です

現段階ではゴブリンに正面から戦って、一人では勝てませんが、成長します。 ゆうじろうの如く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8728x/>

（仮タイトル）すらいむ?に転生

2011年11月4日07時11分発行